



る う て る

2014年
9月
No.808

■発行所
日本福音ルーテル教会事務局広報室
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 1-1
電話 03-3260-8631

■振替口座 ■ 00190-7-71734
■ウェブサイト ■ <http://www.jelc.or.jp>
■E-mail ■ jelc@jelc.or.jp
■発行人 ■ 安井宜生 koho06@jelc.or.jp
■印刷人 ■ 精文堂印刷株式会社
■定価 ■ 1部 40円 (郵税を含む)

説教「人生に必要な荷物」

藤が丘教会牧師 佐藤和宏

自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。(マタイによる福音書10章38節)

引越をしました。

荷造りをしていくと、見慣れないものや不明の箱、懐かしい品々が出て来て、しばし作業する手が止まる。ことがあります。それらは前回、引越してしてから一切手をつけていない荷物でした。私たちは余剰な荷物をたくさん抱えて生きていく現実を、引越しをするたびに思い知らされます。しかし、余分な荷物をすぐに処分出来るかというところを、決まらずには、また使うときがあるかもしれないと次に持ち越してしまいがちです。今回の引越して見いだした余分な荷物も、そのまま引越しの荷物となり、開けられないまま物置に入ることになってしまいました。

私たちは人生を生きるにあたって、荷物を抱えていると言えましょう。生きるためにあれもこれも必要であると思えるため、日に日に私たちの人生の荷物は膨れ上がっています。それでも、余分な荷物を手放すことができず、ましてだれかと分かち合うこともできない私たちがいます。

不必要な荷物はそこに残して、人生を新たに歩み始めるならば、その足取りはこれまでより軽くなり、その後の人生は生きやすくなるはず。本当はそうなのですが、人は重さを増して行くばかりの荷物に押しつぶされそうになりながらも必死になり、その足取

りは重くなるのです。

「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」と言われています。主イエスは人生に必要な荷物としてあれこれ抱え込んでしまっただけで、必要な荷物はただ「自分の十字架である」と明らかにしているのです。

「自分の十字架について考えるとき、私は自らの罪だけを思い描いていました。しかし、「あなたがたも自分は罪に対して死んでいくが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きていくのだと考えなさい」(ローマ書6章11節)というパウロの言葉は「キリストに結ばれて、キリストの十字架に結ばれて、キリストと共に死に、キリストと共に生きる」ことを教えています。つまり「自分の十字架とは、まずキリストが担ってくださったものなのです。そしてその十字架を自分のものとして担って行く。私たちはこうしてキリストに結ばれて生きるのです。」



ある日の聖書日課で、次のメッセージが目にとまりました。

「どんな時にも人生には意味がある。誰かがわたしを待っている。何かがわたしを待っている。その誰かのために、その何かのために、わたしには出来ることがある。」

主イエスが言われた「自分の十字架を背負う」を考えるとき、このフランクルの言葉をわたしは思い起こします。自分の十字架とは、決して重荷のことではありません。主ご自身がその人のために備えてくださったものが自分の十字架です。それはわたしを必要としている誰かのために、またわたしを必要とする何かのために、主がこのわたしを用いてくださるためのものです(部刃)。(高橋誠・ディコンリー福音教団豊浜教会牧師)

「自分の十字架とは、自分のためのものでも、自分に課せられたものでもなく、「主ご自身がその人のために備えてくださったもの」

であると言われています。

私たちのために主は十字架の死を遂げてくださいました。これによって私たちは、もはや自分の人生のために多くの荷物を抱え込む生き方から解放されたのです。そして今や主は、この私を通して一人でも多くの人々に、神の恵みを与えようと望まれているのです。これが私たちが担う「自分の十字架」です。そしてそれは苦しみではなく、「自分が生きていくことに深い喜びを感じる、真の生きがいのある歩みである」と言われているのです。「自分の十字架」とはこの小さく弱い私が主に必要とされていることです。そのためにキリストはまず十字架を負われたのです。このキリストに結ばれて私たちは、自分の十字架を担って歩み始めることができるのです。

キリストの十字架に結ばれた「自分の十字架が私たちに備えられているのです。キリストの十字架に結ばれて、このキリストの十字架に結ばれた「自分の十字架」は、私たちがだれかのために少しづつ担って行く、あらゆる人々に等しく与えられる神の恵みです。そしてこれこそ、私たちの人生に必要な荷物であり、その他の何ものでもないのです。

当時、人々が競って罪の償いを免除する。贖罪を買っていたことに見られるように、中世後期の人々にとっては、「罪の赦し」以上に「罪の償い」の方が事実上、大きな意味を持っていた。石を投じて窓ガラスを割ってしまった。その行為は赦されても、窓ガラスを元の状態に戻す責任は窓ガラスを壊した人にある。壊れた窓ガラスの補修。それが償いの行為に相当する。それが済まない限り、事は決着しないのだ。この償いの行為がなかなか大変で、大部分の人は、現世でそれを果たすことができない。その場合は、死後煉獄で償いの行為を続けねばならないことになる。ダンテの名作「神曲」の煉獄篇は、この煉獄の世界を描いたものだ。地獄、煉獄、天国。この三つが死後の人々を待つ世界であった。

聖書日課セミナー
ひたすら聖書の学びに没頭する3日間
2014年10月20日～22日
ホテルウェルシーズン浜名湖

講師 江藤直純牧師
主催 ルーテル「聖書日課」を読む会
詳細は、以下のサイトへ
<http://goo.gl/qDmCqR> (短縮URL)

教会手帳2015
10月1日発売予定
定価 1,100円

宗務部
北浜教会センター事務局 TEL:011-721-1721/FAX:011-724-5979
札幌市東区南一条1丁目1番10号 TEL:011-561-5664/FAX:011-561-5672
札幌市東区南一条1丁目1番10号 TEL:011-561-5664/FAX:011-561-5672
札幌市東区南一条1丁目1番10号 TEL:011-561-5664/FAX:011-561-5672
札幌市東区南一条1丁目1番10号 TEL:011-561-5664/FAX:011-561-5672
札幌市東区南一条1丁目1番10号 TEL:011-561-5664/FAX:011-561-5672

礼拝式文の改訂



%式文改訂の理由について

白井真樹
日本ルーテル教団式文委員

30年以上の歳月が経過しているということ自体が大きな理由です。先ほど、私たちの教団では現行の式文がようやく定着したと述べてきた。発表から定着まで実に30年を必要としたのです。今、改訂しておかなければ、この先、現行の式文をさらに30年も40年も、見直さず用い続けることとなります。

もちろん良いものが長く用いられることは素晴らしいことです。同時に、この30年の間に、様々な変化がありました。まずは日本語です。かつて使われていた言葉が、現代の人たちには通じなかつたり、違った意味を持つようになったりしています。

私たちが用いている日本語聖書も、『明治元訳』(1887年)、『大正改訳』(1917年)、『口語訳』(1955年)、『新共同訳』(1987年)と改訂が重ねられ、さらに、2016年に『標準訳』が発行される予定です。30年が改訂の一つのサイクルとなつていきます。

「言葉が軽い」「荘厳さに欠ける」。私たちが用いている現行の式文が発表された際に、また、使徒信条や主の祈りの口語化に対して、各地の教会で聞かれた感想です。現行の式文が初めて発表されたのが1982年ですが、私が所属する日本ルーテル教団の各教会では、ようやく最近定着したという印象があります。当初、冒頭のよう

な批判的な感想もあつた現行の式文ですが、長い歳月を経て、現在、私たちは、誇りを持ってこれを用いています。さて、現行式文の発表からおおよそ30年経った現在、ルーテル教会は、式文の改訂作業に取り組んでいます。今なぜ式文を改訂する必要があるのでしょうか。まず、前回の改訂から

た、古きよき伝統的なものとともに、新しいよいものがたくさん生み出されています。

現行式文に対する課題もいくつか指摘されています。そうした中で、今ここで、私たちが改訂作業をしておかなければ、そのような様々な変化や課題を踏まえないうまま、毎週の礼拝を続けていくことになりかねません。

また、キリストの教会は、「今」の私たちのために存在しているのとともに、「未来」の次の世代の人たちのために存在しているものでもあります。私たちが慣れ親しんでいるものが変わることに、寂しさを感じたり、新しいものをなかなか受け入れることができなかつたりすることが、よくわかります。だからこそ、30年前も、現行の式文に、必ずしも肯定的とは言いえない受け止めもなされ、定着するまでに長い歳月を要したのでしょう。

けれども、私たちが宣教的な視点に立つとき、絶えず「今」と「未来」を同時に見つめなければなりません。「今」のものを大切にしつつ、「未来」のために見つめ直し、新たなものを生み出すことの

大切さを思いいます。宣教100年を機に、次世代の若者たちへの信仰の継承と宣教を目標に掲げ、取り組んでおられる日本福音ルーテル教会から、式文改訂の呼びかけがなされたことに敬意を表します。これは、500年を迎える宗教改革の精神に実にあふさわしいことであるとも言えるでしょう。

キリスト教手話と出会う

原田蘭留(小石川教会)

地域で手話を学び始めた頃、本屋で小嶋三義先生の「やさしい手話」キリスト教手話入門(キリスト教視聴覚センター)に出会い、

冊子のような薄いものでしたが、教手話の魅力にグングン引き込まれていきました。手話で「福音は「神」土愛「土」教え。「信仰」は「土」受け入れる」と表すのです。いつも見聞きする聖句も、手話にする

と生き生きと心に迫ってくるのを感じました。ろう者がおられること、手話通訳があることに惹かれ、私は小石川教会に導かれ、それまでの所属教会から転会をしました。そして教手話研修の場で、小嶋先生ご本人との出会いも与えられました。

小嶋先生には教手話通訳をイロハから教えていただきました。教手話通訳は説教を聞き、心で感じて自分の内に絵を描き、それを手で表すのです。ろう者はあなたの手話の中に絵を見ているのです。「手話通訳者は、牧師と同じツールをかけているのです。手話をしている時、イエ

スさまと繋がっているのですよ。」との教えは、私の教手話通訳の原点になっています。通訳は、大変でないと言えはウソになりますが、事前に送られてくる徳野昌博牧師の説教を何十回も読むものですから、いつも祝されている自分に気づかされていく自分気づかされていきます。

通訳の時、自分では分からない手話表現は礼拝前にろう者の方に教えていただいたりします。傾きながら温かく見守ってくれるろう者の方。手話が見やすいように照明に心を配ってくたさる方。「通訳は苦勞様。ありがとう。」と笑顔の方で

加者の佇まいから、説教に対する姿勢もまた変えられていくだろうと思わして終わりではない。むしろ始まりである。キャンプからそれぞれの生活の場に戻り、その歩みの中で聖書により一層親しみ、神が私にしてくださったこと(徳野をいつでも、どこでも問いながら信仰生活を送ってほしいという願いを込めてい音を証する者として歩むことへと導かれるのだということ。

第2回全国青年ハイブルキャンプ報告

竹田大地(ENG-YOUTH)

7月11日から13日、2泊3日の日程で、日本ルーテル神学校を会場として第2回全国青年ハイブルキャンプが行われた。青年10名、スタッフ4名の計14名で聖書と向き合い、メッセージを作成した。

このプログラムの目的は信徒育成である。参加者の中にはすでに教会学校などで奉仕をしている者もいるが、将来的に

教会学校、幼稚園、保育園、諸施設としてキャンプでの伝道の業を担う青年たちが、メッセージを語るために、そのヒントとなる聖書の読み方を学んだ。

高村敏浩牧師を講師として、『だれにでもできる楽しい聖書研究法』聖書研究の手引き(森優牧師著)から「深層法」と「経験法」を学び、それを手がかりにして、み言葉から、イエス・キリストが私に何をしてくださったのかということを感じ、味わい、それを受けて参加者それぞれが5分程度

のメッセージを作成した。このキャンプは、参加して終わりではない。むしろ始まりである。キャンプからそれぞれの生活の場に戻り、その歩みの中で聖書により一層親しみ、神が私にしてくださったこと(徳野をいつでも、どこでも問いながら信仰生活を送ってほしいという願いを込めてい音を証する者として歩むことへと導かれるのだということ。

最終日、三鷹教会での主日礼拝の説教を聞く参加者にとつて重要なこのプログラムをこれから

も継続していきたいと考えている。この働きを覚えて、福音の宣教とルーテル教会を担う人材が育まれる豊かなキャンプとなるよう祈りで支え、また参加者を送り出したい。



きたての原稿と共に「質問でも何でも聞いて！いつでも力になりませ！」とひょうきんにサポートしてくださる徳野牧師。励まし合える通訳仲間など、多くの方々を支えられながら、手話通訳者として立たせていただいています。



今回、小嶋先生の最新刊「キリスト教視聴覚センター」の発刊により、新しく手話通訳者が起こされることを祈っています。

「日本福音ルーテル教会における社会問題への関わり方について」

事務局長 白川 蓮生

前回は「信仰者として一人ひとりが、それぞれに暮らしている社会の中で、まず祈り、そして行動し、発言する。」これがJELCの基本理解であるという考えについて説明しました。これを踏まえた上で、続いて二つの事柄を考

えをもつてゆこうとするのかとの疑問です。個人の判断に任せられて、暮らしている以上、個人が諸々の情報から判断してゆくのが基本になります。聖書を読み、書物等から学び、メディアを通して諸々の意見を聞きながら考えるわけです。その一方で、暮らしに影響を及ぼしている社会問題に対して、「信仰者にとっても大事であるから、個人でしっかりと考えよう」と呼びかけられるだけで良いのか、といった議論を、昨第25回総会期のJELC常議員会で行いました。現実的に考えると、社会問題とは人々の意見や態度が分かれる問題なので、容易に

は答えが出にくい難問となつていのが通例だからです。そして昨年、「社会委員会議定」の改訂がありました。社会委員会の任務で、「教会の内に向けて」JELCに連なる人々が、考えるべき「信仰と良心に基づく視点」について関連する学習情報を提供し、問題に対する理解や涵養を促すための役割を負つ」と規定されました。すなわち、考える主体は個人々々であるが、問題への理解が深められるように、信仰者及びJELCとの二要素を意識した専門委員会から速やかに一定の見解が示され、これを取り掛かりとして、出発するために活用して

もらうよう意図されました。※直近では2014年8月に「真の平和を実現するために」一集团的自衛権の行使を認めよう」との表題で、社会委員会見解がでました。もう一つは、個人でなく、全体教会として信仰的決断による発言や行動をするような事態への対処です。

教会全体の意志形成となれば、信仰者がそれぞれにおかれている立場・状況の異なりがあることは理解されるべきであり、全員一致ということには大変な難しさがあるのは事実でしょう。しかしながら、時に社会問題の深刻さ

や緊急性が高じてきて、看過しえない状況に進むならば、個人を超えて社会的・政治的な発言をするという姿勢をとつてきました。2008年の答申にも、「正義や平和、人間の尊厳については、これが欠けたら神の意志に添わなくなると判断し、あるいは、その増進が神の意志に叶うことだと判断すれば、その信じるところを世に向かつて教会が語ることを躊躇してはならない。」とあり、社会的・政治的な発言をする教会の姿が想定されています。

また、改訂された社会委員会議定にも、「教会を超えた外に向けて生じている事実や行為に対して問

る事案や行為に対して問題性の指摘など、直接的な発言を行い、事態の解決に向けて速やかに発言と行動するための役割を負う。」と、教会の名をもって意思表明や行動をしようとする場面に關する言及が含まれました。これは、単に声を合わせて発言すれば、当然、個人よりも大きな声として影響をもつことになるという意味合いというよりも、深刻さや緊急性が高まり、深刻さや緊急性が高まる状況とは、およそ社会全体に混乱も生じている状況ですから、そこで教会はその特性上、苦難を抱えている社会のただ中で共に歩む姿を取り、社会との関わりに必然をもつ、その

が2年毎にもちまわつて続けてきたものだからだ。というの私も自身が今回この企画に初めて携わった者の一人だからだ。他に2人を新たに迎

え、今年は12名の準備委員で企画を進めてきた。毎年テーマや内容を変えていたが、昨年の東教区50年記念大会を第20回目とし、それを区切りに、今後3年間を宗教改革500年へ向けてシリーズ化したものを企画しようということになった。そのテーマこそ「宗教改革を語る信徒になろう」

である。第一回目は宗教改革を行ったルターという人物をもう一度学びなおそうというところで、江口再起先生(東京女子大学教授)を講師にお招きし、ルター

の生きた時代背景を講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと

感じたことは信徒が信仰生活で起きた印象的な出来事の数々、その中で培われた信仰と思想を分かちやすく講義していただいた。午後は「ワールドカフェ」という手法で、各々講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと

感じたことは信徒が信仰生活で起きた印象的な出来事の数々、その中で培われた信仰と思想を分かちやすく講義していただいた。午後は「ワールドカフェ」という手法で、各々講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと

感じたことは信徒が信仰生活で起きた印象的な出来事の数々、その中で培われた信仰と思想を分かちやすく講義していただいた。午後は「ワールドカフェ」という手法で、各々講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと

第2回

東教区宣教フォーラム報告 「宗教改革を語る 信徒になろう」

準備委員会副委員長
金子直美(浦田教会)

7月5日に東教区宣教フォーラムが浦田教会で行われた。今年で21回目を迎えるこの企画は「信徒の、信徒による、信徒のためのフォーラム」として発足し、第13回以降は中央沿線・総武・城北・城南神奈川の地区の教会

が2年毎にもちまわつて続けてきたものだからだ。というの私も自身が今回この企画に初めて携わった者の一人だからだ。他に2人を新たに迎

え、今年は12名の準備委員で企画を進めてきた。毎年テーマや内容を変えていたが、昨年の東教区50年記念大会を第20回目とし、それを区切りに、今後3年間を宗教改革500年へ向けてシリーズ化したものを企画しようということになった。そのテーマこそ「宗教改革を語る信徒になろう」

である。第一回目は宗教改革を行ったルターという人物をもう一度学びなおそうというところで、江口再起先生(東京女子大学教授)を講師にお招きし、ルター

の生きた時代背景を講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと

感じたことは信徒が信仰生活で起きた印象的な出来事の数々、その中で培われた信仰と思想を分かちやすく講義していただいた。午後は「ワールドカフェ」という手法で、各々講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと

感じたことは信徒が信仰生活で起きた印象的な出来事の数々、その中で培われた信仰と思想を分かちやすく講義していただいた。午後は「ワールドカフェ」という手法で、各々講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと

感じたことは信徒が信仰生活で起きた印象的な出来事の数々、その中で培われた信仰と思想を分かちやすく講義していただいた。午後は「ワールドカフェ」という手法で、各々講義の感想や考えを自由に語り合った。特に「ゴールも無い語りの中からはどんなものが生み出されるのか個人的にはとても楽しみにしていたが、各グループの発表を聞くとなるほどと頷くものばかりであった(10月に報告書発行予定)。そしてもう一つ参加して良かったと



宗教改革500年記念事業 シンボルマーク募集

マルティン・ルターによる宗教改革運動は1517年10月31日に始まり、2017年には「宗教改革500年」を迎えます。日本福音ルーテル教会でも、様々な記念企画がなされており、今後、広く社会の注目を集め、親しんでいただけるような、本事業のシンボルマークを募集します。

●募集要項(詳細は必ず公式HPで確認ください)
1 募集内容
宗教改革500年記念事業シンボルマーク

！マルティン・ルターによる宗教改革と500年の歴史の経過がイメージできること
”キリスト教会の伝統や品位が感じられること”
#1517-2017
マルティン・ルター宗教改革500年」の文字をマークと含めてデザインすること
\$単色加工または、縮小拡大加工にも対応できること
%自作の未発表作品に限る
2 日程
応募締切 2014年10月31日必着
3 応募方法
提出物(作品とその解説住所氏名、電話番号)を提出先まで郵送・持参。もしくはメールにて送付
4 賞
優秀賞1名
賞金5000ユーロ
5 提出先・問合先
〒162-0842 東京都新宿区市谷砂町一丁目
日本福音ルーテル教会
宗教改革500年
シンボルマーク募集係
メール
kohn@jelc.or.jp
6 結果発表
2014年11月27日
受賞者本人へ連絡
7 公式ホームページ
http://www.jelc.or.jp/bosyuhml